

名城大学 経済・経営学会会報

No.89

『名城論叢』
第二十三巻 第一号 付録
二〇二二年七月十五日
名城大学 経済・経営学会 発行

沖繩と戦争 …… 太田志乃
一般会計取支計算書 ……
9 1

沖繩と戦争

—本土復帰五〇年目に復帰後世代が
思うこと—

経済学部 太田志乃

はじめに

本年(二〇二三年)五月一日、筆者の生まれ故郷である沖縄県は本土復帰から五〇年を迎えた。NHKの連続テレビ小説『ちゅらさん』で沖繩好きが増えたといわれるが、この朝ドラは本土復帰三〇年目のタイミング、そして今年四月からは、同じ朝ドラの枠で『ちむどんどん』がスタートしている。『ちゅらさん』と『ちむどんどん』の大きな違いは、前者が現代ドラマとして撮られていたことに対し、後者はいわゆる「アメリカ世(ゆー)」を描いていることだろう。

筆者自身は復帰後生まれであり、「アメリカ世」の雰囲気や直接的には知らない。観光客が「沖繩っぽい」と感じるレストランやスーパー(沖繩でよく目にするファーストフード店「A & W」や「Jimmy's」、「プラザハウス」といったスーパー)などは生まれたときからそこにあるものであり、それが「アメリカ世」の名残であることは、大学進学時、沖繩を離れて初めて知ったことだ。高校時代までを過ごした浦添市では米軍基地が自宅目の前にあつたこともあり、近隣の米人ファミリーがクリスマスやイースターといったイベント時に大味のスイーツを配って歩いていたことも馴染みのある季節行事だった(なぜか、ハロウィンイベントだけは記憶にない。もはや日本のイベントではないかと疑いたくなる)。いわゆる牛肉・オレンジ交渉時も、基地経済で成り立っていた沖繩からすれば、米人向けスーパーで大量に、かつ安価に売られている牛肉やオレンジを後目に、「どうして内地ではこんなに大騒ぎしているのか」と不思議がっていた子供時代だった。

一方で、生まれた頃から祖母と同居していたこともあり、復帰後の話は折に触れて耳にしてきたし、内地の大学に進学した母からは「パスポート持参の留学生扱い、親からの仕送りは米ドル。日本語で話しかけると同級生らが一様に驚いた」といっ

た話も幾度となく聞かされてきた。生まれた頃から日本国籍を有する筆者は、当然のように日本人として教育を受け、「方言禁止」札を持ちながら廊下に立たされることもなく、進学のためには上京しても周りに沖繩生まれであることを揶揄されたこともない（電車定期券の買い方を知らないことに驚かれたりはしたが）。むしろ、すでにリゾート地としてのイメージができていた沖繩生まれであることに、うらやましがられることすらあったくらいだ。

当地のビーチや食文化に興味をもった内地出身の大学の友人らは、自然と夏季休暇中に「沖繩に遊びに行きたい」と言い出す。夏季休暇中は毎年のように、親のクルマを借りて友人らへビーチや那覇市の公設市場などに案内した。このルート上で必ず、友人らを案内した場所がある。南部に位置する「ひめゆりの塔」や「ひめゆり平和記念資料館」（糸満市）である。

一・沖繩戦を知ること

映画化されたこともあり、沖繩戦を語る上で必ずと言って過言ではないほど紹介されるひめゆり学徒の話は、友人らも名前程度は知っていた。ただ、彼女たちは資料館に陳列される学徒の遺品や遺影を目の当たりにすると、知っていたのは名称だけでその史実を知らなかったことをひとしなみに口にした。

沖繩出身者にとって、沖繩戦を知ることには沖繩そのものを知ることである。小学生のころから沖繩戦の悲惨さを学び、内地

とは異なる終戦記念日（慰霊の日（六月二三日））には公的機関はすべて休み、私立の学校も休校となって戦没者を追悼する。太平洋戦争中、日本本土の防衛準備が完了するまでの、防波堤的な役割を担った沖繩の痛みを県民は今も忘れてはいない。慰霊の日はその時の県民の苦しみに思いを寄せながら、恒久平和を願う日である。

沖繩県知事時代に「平和の礎」を設置し、沖繩戦体験者として平和研究を続けてきた大田昌秀氏は、沖繩戦では「その歴史的背景や政治、社会、文化などの諸条件がからんで、おそらくは、他の戦争ではみられない異常な事件が起こった」（大田「二九八二、一六六頁」と残している。先のひめゆり学徒隊の話はその一例であり、年端もいかない若い女性が無残な死を遂げたことで、知られるようになったのだろう。

その一方で、平和学習で沖繩のことを学んだ県民には既知の事件だが、内地の人にはさほど知られていない事件も多い。そのひとつが「対馬丸事件」である。昭和一九（一九四四）年七月、日本政府はサイパン島の玉砕を受け、沖繩の老幼婦女子に対し、本土への緊急疎開指示を出した。沖繩には本土から兵隊が上陸する。少しでも食い扶持を減らすために、前線にたつことのない県民が対象となったのだ。この疎開には、親元から離れるには早すぎる幼児、小学生も含まれており、その学童らが乗った船のひとつが学童集団疎開船「対馬丸」である。対馬丸は同年八月、米潜水艦により撃沈し、学童約七八〇名が犠牲になったとされる。

二・祖母と対馬丸

ここで筆者がこの事件を記す背景を述べたい。冒頭に祖母と同居していたと記したが、この祖母（太田洋子）が、対馬丸に乗船していたはずだったからである。八人兄妹の次女だった洋子は家計を助けるために那覇市の料亭に奉公に出ており、奉公先の奥方の付き添いで対馬丸に乗船、九州への疎開を予定していた。しかし、なぜかこの奥方が対馬丸への乗船を拒み、別の疎開船で九州に向かって終戦を宮崎で迎えたそうだ。この方も長生きされたので、「どうしてあのかい、対馬丸乗船を拒んだのか」直接、問うたことがある。「なぜだか覚えていない」という回答、加えて祖母の洋子も覚えていないという。ゆえ、詳細ないきさつは祖母もこの奥さまも他界した今となっては知る由もないが、自分の身内がこの事件に関わったかもしれない事実は、小学生時代の筆者にも強く印象に残った。そのためか、「対馬丸」というフレーズには高いアンテナを持つようになったのかも知れない。

この対馬丸事件はいろいろな角度から、沖繩戦の悲惨さ、残酷さを知らせてくれる。まずは、県民が望まなかった疎開という面である。日本本土でも、激しい空襲を迎えた地では親元を離れた学童疎開の例が多くある。沖繩県民の疎開が本土のそれと異なるのは、上述したように日本兵が沖繩に集約することの代わりとして、県民を遠く離れた九州や台湾に疎開させたことである。約一〇万人の兵が沖繩に集約し、結果として計七万人の県民が疎開を余儀なくされた（山川「一九六九」）。疎開者

輸送に要した艦艇、輸送船は昭和一九年七月から翌二〇年三月初旬までで一八七隻にも及んだという（同上、二二頁）。なかでも学童疎開は、「悲壮な家族会議や親族会議のすえ」、ようやく踏み切られた。「玉碎すれば、沖繩県民は滅びてしまうんだ……」「玉碎から学童を守れ！」（同上、二七頁）と意を決してわが子を離れた親がどれだけ苦しんだことだろう。

加えて、米軍によって撃沈された疎開船は対馬丸だけではない。かつて事実もある。対馬丸事件の三年前、米海軍省は「無制限潜水艦戦発令」を発令している。これは戦争状態において、敵国に關係すると思われる艦艇・船舶に対して目標を限定せず、無警告で攻撃する作戦であり、一般的な貨物船も戦艦や航空空母と同様の戦争機械の一部とみなされた。そして対馬丸事件の前年、米軍は沈没させた日本輸送船から船舶暗号書を引き上げ、暗号解読に成功している。結果として、米軍は日本船の航路を読み解くことができ、対馬丸同様に多くの日本船を沈没させた。その一隻が一九四四年六月、四、六〇〇人の兵隊を輸送中、米潜水艦の魚雷を受け沈没した「富山丸」である。この事件では約四、〇〇〇人が犠牲になったとされるが、この事件だけでなく日本船が敵軍によって沈没させられたことに對し、日本軍は徹底した箝口令を敷いた（早乙女「二〇〇八」、二一―二二頁）。もちろん、沖繩県民も事件を知ることなく、県外へ出るためには絶対的に必要となる船に乗り、疎開したのだ。この事件は対馬丸事件のひと月前の出来事だ。多くの日本船が敵軍によって襲撃されている事実を知っていたら、親としてわが子を船に乗せたであろうか。

そればかりではない。この日本軍の箝口令は、対馬丸の生存者にも暗い影を落としている。

三・沖繩と日本、日本軍

(一) 日本軍の絶対秘密として処理された対馬丸沈没

ほかの沈没した船同様に、対馬丸も襲撃を受けて沈没したことは遺族たちにも知らされていなかった。また、船が沈没した後、ほかの船に救助されたり、近くの島まで泳いでたどり着いたりして一命をとりとめた者たちは、日本軍からこのことを他に漏らさぬよう、強いられたという。対馬丸の生存者をインタビューした早乙女愛氏は、下記のように例示している(早乙女「1008」)。

「盛守は鹿児島港に着いてすぐ、憲兵の姿を見た。遭難したことを口に出さないように取り囲まれ、見物人や迎えに来た家族たちはフェンスの向こうに遠ざけられた」(同上、一二六頁)、「七名を救助した船員の高男は手柄をほめられるどころか、憲兵に罵倒された。(中略)「もしこのことをもらしたら、軍法会議にかけて死刑にしてやる」(同上、一二七頁)。

彼らが重い口を開いたのは、戦後になってからである。なかには、対馬丸事件を語り継ぐことで、戦争の悲惨さを後世に残す活動をされている方も多い。もちろんご高齢だが、苦しい気持ちを抑えつつ、自らの辛い体験を基に平和の尊さを、戦がない世界を望むその声は、強くわたしたちの心を動かす。

ところで、日本政府による箝口令が布かれた事件、事故は対

馬丸事件だけではない。そのひとつが、沖縄県宮鉄道の爆発事故である。いまは鉄道がない沖縄だが、戦前は県営鉄道が県民の交通手段となっていた。この事故は、昭和一九(一九四四)年二月、同鉄道糸満線で発生したもので、二二〇人近くが死亡している。戦時中の沖縄では、米軍の上陸に備え、同鉄道を利用した兵員、武器弾薬輸送が行われていた。二月一日、ガソリン入りドラム缶を搭載した車両が爆発、兵員だけではなく通学中の女学生らが犠牲になった。機関車の煙突から出た火の粉が、屋根なし車両に搭載していたドラム缶に引火、爆発したことが事故の原因である。ドラム缶の火はすぐに戦闘用弾薬にも引火し、被害が拡大した。列車には多くの医薬品も詰め込まれていたが、それらも無くなった。

この事故は米軍による攻撃、奇襲をきっかけとするものではない。安全確認がとれていれば防げたはずの事故だ。そのためか、日本軍はこの事故に対しても箝口令を敷いた。沖縄の地元紙「琉球新報」(デジタル版、二〇二〇年二月一日付)はこの事故車両に乗り合わせ、同乗していた友を失った女性の証言を記載している。友人が犠牲になったことに苦しみつつ、ご自身も事故原因を口にできない苦しさを抱え続けた辛さをわたしたちは推し量ることしかできない。

上述したように、沖縄で育った筆者の世代は、この対馬丸事件、軽便鉄道爆発の事故を平和学習の一環で学んだ。この学習の時間に学んだ、感じたことや、祖父母など戦争体験者から聞いた話が戦争に対するイメージ、思いにつながっている。戦後生まれ世代ではそれが当たり前だと思っていたし、特に同世代

であれば、同じようなイメージを戦争に対して抱いているだろうと勝手に思っていた。ただし、その考えが過ちであったことに気付いたのは、本学に勤務したしてからである。

正直なところ、これまでは戦争というフレーズに対して思いを寄せるのは、沖縄復帰や慰霊の日が近づく五、六月、そして日本が終戦を迎えた八月ころであり、日常的にそれを考えたり学んだりする姿勢は筆者にはなかった。研究者の道に進んでも、特に研究対象分野でもなかったことから、沖縄で学んだ「戦争」イメージを抱いたままだった（ゆえ、本会報No.8に経済学部大瀧真俊教授が執筆された沖縄戦における軍馬の存在についてはまったくの無知だった）。

そのイメージを大きく変化させたきっかけは、経済学部の社会ワールドワーク「愛知空襲と愛知の産業構造」である。このワールドワークには、勤務初年時から渋井康弘教授と一緒させて頂いており、準備のために第二次世界大戦時の資料や文献、統計データなどにあたるようになった。そうして沖縄以外の地の戦争体験、犠牲者の談などを見聞きする中で、気付いたことがある。それは、沖縄で学んできたことの多くが、「日本政府、日本軍によって犠牲になった沖縄」の立場にあるということだ。もちろん、米軍による火炎放射戦車や黄燐性焼夷砲弾など新兵器が利用された激しい地上戦など、あらためて知るべき事項も多い。一方で、先の対馬丸や軽便鉄道の事件、事故に対して敷かれた箱口令や、住民が日本軍に強制された集団死、方言を使うことによりスパイ嫌疑をかけられた結果、日本軍に虐殺された住民犠牲など、「日本政府による」、「日本軍による」

県民への圧力がいかに大きかったか。筆者世代の多くは、平和学習の場でその雰囲気を感じ取ってきたはずである。米国だけではなく、日本という国によっても犠牲を強いられた沖縄の立場だ。

(二) 日本軍に虐殺された筆者の曾祖父

筆者の祖母、洋子の実父（筆者の曾祖父）は日本軍により敵軍スパイ容疑をかけられ、軍刀で銃刀で虐殺されている。その話の詳細を、祖母は語ることはなかった。なぜ父親に嫌疑がかけられたのか、その後、家族は周辺住民からどのような目でみられたのか。祖母にとって最愛の父を日本軍に殺された事実を、決して忘れることはなかったはずだが、彼女はこの事実を孫に語ることはありませんでした。実父の話になるといつも涙ぐんだままで、ほかの話題にすりかえていた。

後日、筆者は社会ワールドワークの講義資料として文献やドキュメンタリー映画に触れる中で、偶然にも曾祖父の名前に遭遇する。驚いたことにその名前は、米国立公文書館に残された沖縄戦で戦死した日本兵の軍用手帳から判明したものだそう。この手帳には、持ち主である日本兵が一九四五年四月一七日、「オダさん」という名前の住民をスパイ容疑で殺害したことが記されているらしい（ドキュメンタリー映画「スパイ戦史」）。手帳から推測される日本兵の移動行程や、殺害日時から、私の曾祖父であることを琉球大学の研究者が明らかにしている。これを受けて、琉球政府立法院議長を務めた山川泰邦氏は、一個人である曾祖父の虐殺場面を、当時の周辺住民に聞

き込み調査し、『秘録 沖繩戦記』に残している。

筆者がこの事実を知り、文献にあたつたのはこの数年の話で、既に祖母は鬼籍に入つていた。戦争の世に生まれ、戦後も生き延びるのに必死だつた祖母は文字を習う機会もなく、小学校低学年程度の漢字の読み書きしかできなかったため、実父の話が記録として残されていることを知つても本を手取ることはなかつたかもしれない。否、文字を読めたとしても手に取ることを拒否したかもしれない。『秘録 沖繩戦史』に記載される曾祖父の最期は、直接会つたこともない筆者でも読み進める手が震え、当時の祖母を思うと胸が苦しくなつた。

四・復帰後生まれの世代が思うこと

復帰五〇年目を迎え、沖繩県はもとより内地でも沖繩に思いを馳せる新聞記事などを多く目にした。ロシアによるウクライナ市民の虐殺に沖繩戦を重ねるような記事や、米軍基地のあり方を問う記事、沖繩経済の問題点を追及する記事など視点は様々だ。なかには米国や中国の世界戦略との関わりの中での沖繩のあり方を考えた論説も数点あつた。もちろん、これらの意見、主張のすべてに賛同するものではないけれども、新聞の記事に目を通すたびに筆者自身は違和感を覚えた。

実のところいまも、その違和感がどこから生じたのか判らない。ただひとつ言えることは、ひめゆりの乙女たちや鉄血勤皇隊、通信隊として戦場に駆り出された学徒たち、そして対馬丸や軽便鉄道事故の犠牲者、筆者の曾祖父は、いまの沖繩をどう

思うか。彼ら戦没者たちがみることが出来なかつた沖繩のいまを、彼らの気持ちになつて考えることはとても複雑で、とても難しい。

沖繩戦の写真、フィルムของ多くは、米軍によつて撮影された記録がほとんどだ。多くの人が知る「白旗の少女」の写真も米軍戦闘カメラマンによるものである（写真）。

他方で、一命をとりとめた方の「語る」活動や、そのご子息による語り継ぎ、そして沖繩県各地の自治体に残る体験集などは壮絶な沖繩戦を想像する貴重な「声」である。復帰後生まれの筆者は「戦争体験」を語ることは出来ないが、対馬丸に乗船予定だつた祖母が戦の世の話をするとき、彼女が涙ぐむ場面が多かつたことを伝えることはできる。戦争体験者に触れ、その言霊を伝えることができる世代として、「声」を発することができ最後の世代だろう。これら多くの「声」から壮絶な沖繩戦を想像し、沖繩がおかれている現況を結び付けて考えること、それこそが沖繩の未来を考え、行動することにつながる。

ただし、「沖繩がおかれている現況」とは正確には何を指すのだろう。国土の1%未満の県土に、全国の七割近い基地が集まっていることは数字から明らかだが、この値が何を示すのか。もちろん、世界一危険な基地とされる普天間基地のあり方などについては、安全保障上の問題、騒音面での問題など議論が必要である。一方で、米軍基地に大きく依存し、自立経済には程遠いという課題も内包する。普天間基地返還の日本合意から四半世紀近く過ぎたけれども、辺野古移設が進まないのはゆるぎない事実である。基地の存在と沖繩経済の関係は、沖繩県と日



米軍戦闘カメラマンにより撮影された「白旗の少女」(1945年6月25日)

注) 沖縄戦を研究していた大田昌秀氏が写真を発見し、本に掲載(1977年発表)したことから注目を集めた。

写真出所)「朝日新聞」デジタル版、2016年6月23日付 (<https://www.asahi.com/articles/ASJ666DN6J66UEHF01K.html>)より転載。2022年5月15日検索。

本政府の関係同様に、協和するのか反目するのか、未だ解はでない。

沖繩に集中する基地を見て育ってきた筆者たちは、基地が及ぼす沖繩経済への影響も俯瞰できる。生まれる前から基地があることが当たり前だったこの世代は、おそらくは復帰前から沖繩に暮らしていた沖繩人や、内地の人とは異なる基地への感情を抱いている。この表現に難しい感情と、戦争体験者の「声」に触れてきた体験が交錯するのが筆者世代だ。本土復帰五〇年目にして、理想的な沖繩の姿を巧みに表現できないことが、様々な新聞記事、報道内容に共感できない背景なのかもしれない。

この稿は（たまたまだが）沖繩帰省時に一気に書き上げた。ゴールデンウィーク前には梅雨入りしていた沖繩だが、今日は梅雨の晴れ間がのぞき、灼熱の太陽が眩しく外出もままならない。沖繩が敗戦を迎えた六月二三日の天気はどうだったのだろう。熱帯に属する沖繩での地上戦は、暑さ、熱さとの闘いもあったかもしれない。そんなことをつらつら考えながら、新聞記事に覚えた違和感の背景を今も問い続けている。

参考文献・資料

- 大田昌秀 編著『総史沖繩戦・写真記録』岩波書店、一九八二年。
早乙女愛『海に沈んだ対馬丸』岩波ジュニア新書、二〇〇八年。
対馬丸事件取材班『満点の星…対馬丸真実の証言』文芸社、二〇〇八年。
山川泰邦『秘録沖繩戦記』読売新報社、一九六九年。

「朝日新聞」デジタル版、二〇一六年六月二三日付 (<https://www.asahi.com/articles/ASJ666DN6J66UEHF01K.html>) 4
り転載。二〇二二年四月一五日検索。

「琉球新報」デジタル版「軽便鉄道爆発「青春なくなつた」九一歳に深い傷 七六年前の弾薬爆発、友も犠牲。軍は公にせず」二〇二〇年十一月一日付 (<https://ryukyushinpo.jp/news/entry-1239639.html>) 二〇二二年四月二九日参照。

映画『沖繩スパイ戦史』三上智恵、大矢英代監督、東風、二〇一八年。